

國學院大學學術情報リポジトリ

『交易問答』明治14年版の日本語学習用テキストとしての特徴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉松, 香苗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000869

『交易問答』明治 14 年版の 日本語学習用テキストとしての特徴

杉松香苗

1 はじめに

加藤弘之(1836-1916)の著作である『交易問答』は、明治 2 年(1869)と明治 14 年(1881)に刊行されている(以下、各々 2 年版、14 年版と呼ぶ¹⁾)。2 年版は、イギリス外交官のサトウから会話文の最良モデルとして高く評価され、イギリス外交官の通訳の昇進試験でも用いられている(楠家 2017)。14 年版は、米国長老教会宣教師ウィリアム・インブリー(William Imbrie, 1845-1928)の序文をもち、そこで述べられている出版目的から、平仮名の習得を目的とした日本語学習用テキストとして編集されたことがわかる²⁾。

装丁は、2 年版は和装四六形の木版の小本で、14 年版は菊半形活字本の中本である(吉野 1929, 李 2010b 2011b)。ページの構成は、2 年版は上下巻に分かれ、本文上巻 31 丁、下巻 35 丁からなるが、14 年版は上下合本 33 丁である。2 年版は加藤の序文、下巻末に耶蘇教についての問答があるが、14 年版には、加藤の序文はなくインブリーの序文が掲載され、巻頭に五十音の音訳(ローマ字)と仮名字体例の表、巻末に正誤表が付されている。耶蘇教についての問答はない。

2 年版については、言文一致運動史の観点から、デゴザル体採用に先鞭をつけた近代啓蒙書として山本(1960, 1965a, 1965b)で紹介されている。木坂(1976)は、2 年版を含む明治

2 年から 12 年のデゴザル体の文章を調べ、文末と句末の表現形式を分析している。古田(2004)は、江戸期後半と明治初年頃のデゴザル体の文章を比較している。他にも李(2010b)や田中(1983)で取り上げられている。14 年版については、山本(1965a)は、2 年版の「でござる」調がすっかり「でござります」調に書き直されていると指摘し、前近代的な辞法の「でござる」の衰微退場の時期を明治 14 年から 18 年頃とする根拠の 1 つとしている。李(2010b)も 2 年版と 14 年版の異同について触れ、文末表現の「でござる」が「でござります」、「～て見なさい」が「～てご覧なさい」に変わっていることについて言及し、明治 14 年という時代にして東京語の規範意識から江戸語的な口上がそぐわなくなったのであらうと述べている。

14 年版は、序文で述べられているように、平仮名の習得を目的とした日本語学習用テキストであるため、わかりやすい活字の使用や仮名字体例の表等、平仮名を覚えるための様々な工夫がある。一方で、文末「でござる」が「でござります」へ書き直されるというような、平仮名の習得には直接的に必要とは思われない本文の変更もある。これは、宣教師が説教のため日本語の会話能力の習得を目標としていることが関係していることは想像に難くない。

本稿では、『交易問答』の 2 年版から 14 年版への変更点を調査し、14 年版の特徴を明らかにすることにより、14 年版がどのように日本語学習用テキストとしての相応しい形に改められているかについて論じる。

2 『交易問答』2 年版から 14 年版への変更点

14 年版は、2 年版をどのように改編したのであらうか。本稿では、『交易問答』の上巻の本文について 2 年版から 14 年版への変更を調査する。

2 年版から 14 年版への変更点を、文体と語法・文字表記・送り仮名に分けて考察する。

先に述べたように、2 年版はデゴザル体で書かれているが、14 年版は文末「ござる」が「ござります」に変更されている。また、2 年版の一部の文末の動詞が 14 年版では丁寧形に変更されている。

2 年版と 14 版の上巻の本文の文字表記を比べると、2 年版では漢字で書かれていた語が 14 年版では平仮名になっているというような、同位置の語の表記に 2 年版と 14 年版で異なる文字種を用いているものがある。また、「間」の 2 年版の振り仮名は「あいだ」であるが、14 年版では「あひだ」となっている。このように、仮名遣いを変更しているケースもある。さらに、同位置の語の表記に用いられている平仮名の字体が 14 年版で変わっているケースもある。漢字については、2 年版は木版、14 年版は活字本であるので、2 年版は草書体が多く、14 年版は楷書体で書かれている。本稿では、漢字の書体についての違いは扱わない。

送り仮名については、どこから送っているかが 2 年版と 14 年版で異なる。本稿では動詞の送り仮名について扱う。以下、各項目について考察する。

2.1 文体と語法

2 年版から 14 年版へどのように言葉の使い方が変わっているかについて、添付資料 1 に示す。

デゴザル体の文章である 2 年版上巻の文末（一部句末）表現「ござる」「ござらん」「ござらう」等のゴザル系の語 58 例が、14 年版で変更されている。表 1 にまとめる。

表 1 ゴザル系の語の変更

2 年版	14 年版	数
ござる	ござります	36
	ある	3
でござる	だ	3
ござらん	ござりませぬ	11
ござらふ	あらう	2
ござろう	ござりませう	1
その他		2
	計	58

2 年版で「ござる」で終わる文は、14 年版では「ござります」に変更されている。「ある」「だ」に変わっているものは、「ござる」に助詞カラ、ガが接続しているものである。

(1), (2) は、表 1 のその他の項目に入る用例である。

(1) 何で天子様は大事になさって、彼奴等がいふ通りになさるでござるやら。(2 年版) → ことやら (14 年版)

(2) 跡は下の巻で話すでござろう。(2 年版)

→ 御話を致ませう (4 年版)

次に、語法の変更点をあげる。動詞の連用形が促音便化しているものは 6 例あった。() 内は振り仮名である。

2 年版

4 年版

作(つく)りた — 作(つくつ)た

持(もて)参(まい)りて — 持(もつ)て参(まゐつ)て

切(き)りて — 切(きつ)て

よくなりて — よくなって

なりて — なって

減(へ)りて — 減(へつ)て

「なかった」の意味をもつ助動詞ナンダが「～なかった」

に変更されているものが1例ある。

- (3) 加之^{おまけになに}何も^か角もよいことは出来^{でき}なんだことと見える。(2年版) → 出来なかった (14年版)

「方」について、2年版では、(4)のように移動の方向や到達点を表す助詞ニが接続しているときは「かた」の振り仮名がふられ、(5)のように場所を示す助詞ニテが接続する場合は振り仮名がない。14年版では、移動の方向を意味する助詞ニやへが接続する「方」は「ほう」と仮名を振り、助詞ニテが接続する場合は、助詞をデになおし「方」を「かた」と読ませている。

- (4) 稲八^{いねはち}の作^{つく}った稲麦^{いねむぎ}を。糸助^{いとすけ}の方^{かた}に持参^{もてまい}りて (2年版)
→ ほうに (14年版)

- (5) 稲八が方^{かた}にて稲麦^{いねむぎ}少々^{せうせう} (2年版) → 方で (14年版)

2年版では「見なさい」が2例あるが、14年版では「ご覧なさい」に変わっている。他にも2年版の「みへる」は「見えます」に変わっている。一方で、交易についての説明部分で、2年版では文末に「ある」「くる」等の普通形で終わっている表現は、14年版でも変更はなく、文末の全てが丁寧形に変更されているわけではない。しかし、頻度の高い文末の「ござる」が「ござります」に変わっていることから、14年版は文体が丁寧体が変わっているとしてよいであろう。

14年版では連用形の促音便が使われている。宣教師は話し言葉の習得が目的であるので、書き言葉の表現は避けたと思われる。また、14年版は総ルビであるので、漢字の読みも曖昧にできない。「方」のように複数の読み方があるものについては、注意深く読みを決めたことが推測される。

2.2 文字表記

文字表記の変更として、文字種の変更、平仮名の字体の変更、仮名遣いの変更の順に考察する。最後にその他として、

先の 3 つの何れにも含まれないが、平仮名の表記の変更と考えられるものをまとめる。

2.2.1 文字種の変更

同じ位置にある語について、2 年版上巻では漢字で表されているものが、14 年版では平仮名で表されている場合と、2 年版では平仮名で表されているものが 14 年版では漢字で表されている場合がある。ただし、14 年版は総ルビのため、漢字には振り仮名が付いている。2 年版は振り仮名があるものもないもの存在する。用例の一部を以下に示す。() 内はページを表す

< 2 年版 >		< 14 年版 >	
^{こしら} 製へる (4 オ)	-	こしらへる (2 ウ)	
^{もら} 貰ふ (5 ウ)	-	もらふ (3 ウ)	
事 (5 ウ)	-	こと (3 ウ)	
ただ (13 オ)	-	^{ただ} 唯 (7 ウ)	

14 年版の「こしらえる」は、他では振り仮名付きの漢字で表記されている所もあり、同じ語が常に同じ文字種で表されているわけではない。

2.2.2 平仮名の字体の変更

14 年版には、巻頭に仮名字体例の表が付されている。14 年版の本文では、1 つの仮名に対して、「は」「ゐ」の 1 種類から多いものでは 4 種類（「の」「ほ」等）の字体が用いられているが、2 年版の上巻では一つの仮名に対して概ね 1, 2 種類の字体しか用いられていない。異なる字母をもつ字体を多く使っている仮名は、「は」の 4 つ（字母；波、八、者、盤）、「す」の 3 つ（字母；春、寸、須）である。また、14 年版では 2 年版とは異なる字体を用いている例がある。例えば、2 年版の「を」に対して、14 年版では字母が「越」の「を」が

多く用いられている。14 年版の目的が仮名の習得であることから、様々な字体を意図的に用い、様々な平仮名を習得できるように改編したと考えられる。

2.2.3 仮名遣いの変更

2 年版と 14 年版の上巻で同じ位置にある語の仮名遣いが異なっているものを調べる。

14 年版は総ルビであるが、2 年版は振り仮名がない漢字もある。2 年版で振り仮名のない漢字は、14 年版との仮名遣いの比較はできない。また、2 年版は、同じ漢字でも送り仮名や振り仮名が異なるものがある。例えば、「見える」の表記は、「^み見える」(4 ウ 4) の場合もあれば「みへる」(9 オ 1) もある。また、「^{みへ}見た」(18 ウ 2) と送るものもある。「追々」についても「^{をい}追 / \」(8 オ 1) があれば「をひ / \」(18 オ 8) 「おひ / \」(4 オ 4) もある(「 / \」: く の 字 点)。このように、語によってはその仮名遣いに一貫性がないものがある。2 年版の中での仮名遣いの揺れについてはここでは調査しない。

平仮名の表記を変更している語は、のべ 213 例あった。うち 172 例が 2 年版の仮名表記を歴史的仮名遣いや字音仮名遣いに従って 14 年版で直したと考えられるものである。例を一部あげる。平仮名は左に示した漢字の読みを表すが、動詞と形容詞については、2 年版と 14 年版では送り仮名の付け方が違うものがあるため、送り仮名を省略した。

	<2 年版>		<14 年版>
売買：	うりかい	—	<u>うりかひ</u>
御上：	をかみ	—	<u>おかみ</u>
織：	をつた	—	<u>おつた</u>
大：	ををきく	—	<u>おほきく</u>
大：	をほきく	—	<u>おほきく</u>

大坂：	おおさか	—	<u>おほさか</u>
	そういふ	—	<u>さういふ</u>
双方：	そうほう	—	<u>さうほう</u>
塩：	しを	—	<u>しほ</u>
政道：	せいどう	—	<u>せいだう</u>
都合：	つがう	—	<u>つがふ</u>
通：	とをり	—	<u>とほり</u>
居合：	をりあい	—	<u>をりあひ</u>
蠟燭：	ろうそく	—	<u>らふそく</u>

2 年版の仮名遣いが歴史的仮名遣いに拠っているにもかかわらず、14 年版で変更したものが、のべ 7 例あった。以下に例をあげる。2 年版の下線を引いたものが歴史的仮名遣いに拠る表記である。

	＜2 年版＞		＜14 年版＞
企：	<u>くはだて</u>	—	くわだて
巧者：	<u>こうしや</u>	—	かうしや
儲：	<u>まうける</u>	—	もうける
儲：	<u>まうけ</u>	—	もうけ
始終：	<u>しじう</u>	—	しじふ (2 例)
太閤：	<u>たいかふ</u>	—	たいかう

2 年版の「巧者」は 14 年版では「功者」の漢字が用いられていたが、解釈上「巧者」が適切と考えられる。仮に「功」であったとしても、その字音はコウであるので、「こうしゃ」が字音として正しい。「儲」については、本文では「まうける/まうけ」と仮名がふられているが、文末の正誤表において「もうける/もうけ」に変更されている。「企」「巧者」については、ヘボンの『和英語林集成』の再版（1872）³を確認したところ、14 年版と同じく「クワダテ」「カウシャ」との記述があった。一方、「儲」については「設」の漢字が当てられているものの「マウケル」と書かれており、また、「始

終」は「シジウ」と歴史的仮名遣いで記述されている。

ところで、以下のように 2 年版の表記が『和英語林集成』再版と同じであるが、14 年版で歴史的仮名遣いに直しているものもあった。

	< 2 年版 >		< 14 年版 >
世話料：	せわりやう	—	<u>せわれう</u>
無類：	むるい	—	<u>むるゐ</u>
結構：	けつかう	—	<u>けつこう</u>
見：	みへた	—	<u>みえた</u>

2 年版と 14 年版の両方で歴史的仮名遣いにあわない例は次のもので、「滅法」の 3 例と「儲」の 1 例である。

	< 2 年版 >		< 14 年版 >
儲：	もふけ	—	もうけ
滅法：	めつぼう	—	めつぱふ

左の語の歴史的仮名遣いは「めつぽふ」である。『和英語林集成』には「メツパフ」と書かれており、14 年版と同じである。「儲」は 2 年版には平仮名表記のみであった。

以上のことから、仮名遣いの変更に『和英語林集成』だけを参考にしたとはいえないことがわかる。

明治初期は仮名遣いが恣意的であったことが知られており、2 年版も同一語に様々な仮名遣いを用いている場合がある。これは学習者を混乱させるものであろう。

ところで、『和英語林集成』は、大体は歴史的仮名遣いに従っており、字音語についても字音仮名遣いを正しく使った例が多い(築島 2014:145)。インブリーはその著作『Handbook of English-Japanese Etymology』(初版 1880, 2 版 1889)の活用表がサトウの『会話篇』(1873)に準じたものであるなど、サトウから影響を受けている(杉松 2018)。サトウの『会話篇』の第三部は、第一部の対話文を仮名文(1 章～14 章)と漢字仮名交じり文(15 章～25 章)にしたものであるが、松村

(1998:395)は、多少の例外はあるが、全体としては歴史的仮名遣いによろうとしていると述べている。14年版は、『和英語林集成』『会話篇』にならって歴史的仮名遣いに従って、仮名遣いを直したと考えられる。

2.2.4 その他の平仮名表記の変更

平仮名の表記を変更している語のうち、2年版では濁音・半濁音が省略されているものが、のべ20例あった。一部例をあげる。

	<2年版>		<14年版>
品々：	しな / \	—	しな <u>ノ</u> \
辨：	べんしる	—	べんじる
	なければ	—	なければ

振り仮名が変更されているものは、「僕」4例を含め、7例あった。

	<2年版>		<14年版>
僕：	わたし	—	わたくし
先刻：	さき	—	さっき
各人：	てんノ \	—	てんで
不届千萬：	ふとどきせんまん	—	ふとどきせんばん

また、否定の「ん」の表記が「ぬ」に変えられているものが5例あった。

	<2年版>		<14年版>
	しりなさらん	—	しりなさら <u>ぬ</u>
	ならん	—	なら <u>ぬ</u>
似合：	にあはん	—	にあは <u>ぬ</u>
	わかりません	—	わかりませ <u>ぬ</u> (2例)

2.3 送り仮名

2.3.1 明治初期の送り仮名

送り仮名は、漢字仮名交じり文で、漢字の読みを確定するために、漢字に添えられる仮名であるが、明治に至るまで、統一的な「送り仮名法」と言ったものが社会的に確立するということとはなかった(原口 1989:178)。山東(2002)は、明治40年(1907)刊行の国語調査委員会編『送仮名法』の成立までの経緯についてまとめている。それによれば、明治14年以前の送り仮名に関する著述は、中根淑(明治9年, 1876)『日本文典』内「送り仮名法則」で、これが送り仮名について組織的に述べられた最初の著述であると述べている。「送り仮名法則」は、活用語尾を送る(形容詞を除く)ことを大きな特徴とするが、変化と語の性質の2点に着目した送り仮名法で、活用や転成からなる品詞の特性を重視している。

それ以前の送り仮名の付け方について、久保田(1998)は明治初期の以下の文献を調査している。

仮名垣魯文(明治4,5年 1871, 1872)『安愚楽鍋』

総ルビに近い漢字平仮名交じり文

福沢諭吉(明治6~9年刊 1873~1876)『学問ノススメ』

漢字片仮名交じり文

小学読本五種(『小学教授書』明治6年、『小学入門_{甲号}』明治7年、『小学読本』明治6年田中義廉編、『_{小学}読本』明治6年榊原芳野編、『_{小学}読本』明治7年榊原芳野・那珂通高・稲垣千穎編)

久保田(1998)は、上記の文献の送り仮名の付け方については次のように指摘している

『小学教授書』『小学読本』以外の送り仮名

動詞：助詞、助動詞がつく場合や、複合動詞の前項の場合は送らないことがあるが、それ以外は活用語尾を送る。連用形が名詞化したものは送らないことが多い。

形容詞：活用語尾を送る。

形容動詞：活用語尾から送り「か」「らか」等は送らない。

副詞・接続詞：一部の語を除き最後の音節を送る（但し送らない文献もあり）。

代名詞・連体詞：両方とも送る文献と、連体詞は送る文献がある。

『小学教授書』『小学読本』の送り仮名

動詞：活用語尾は送る。連用形が名詞化したものも、もとの動詞の活用語尾に当たる部分を送る。

形容詞：活用語尾を送るが、シク活用に「し」を送らないものがある。

形容動詞：接尾辞「か」を送る。

代名詞・連体詞：代名詞の方に「れ」を送る。

『安愚楽鍋』では、活用語尾を送らないものには語尾を振り仮名に含めてしまうものがあり、「乗^{のつ}て」「捨^{すて}ず」というような例を挙げている。送り仮名に対する規範意識は感じられないが、振り仮名があるので誤読されることはない。一方、ルビのない文では送り仮名に読み方の明示機能を窺わせる例もあったと述べている。

以上のように、明治期においては、活用語尾は送るということが浸透し、それに従い積極的に送り仮名の体系化がはかられてきた時代といえる。

総ルビの文章の送り仮名について、屋名池(2009)は、動詞などの場合、原則として読みが2拍までの語では送り仮名が送られないと述べている。(2拍目が、テ・タ・ナイなどの後続要素(ルとその変化形も含む)である場合はそこから送る。)

江戸期の送り仮名については、原口(1989)、神作(2003, 2005, 2016)、坂口(1989)等の研究がある。動詞の音節数、活用と送り仮名の傾向について論じている。

2.3.2 『交易問答』2年版と14年版の動詞の送り仮名

動詞の送り仮名の付け方について、2年版と14年版の上巻を比較する。2年版の動詞の送り仮名については、日本語歴史コーパス（CHJ）を用いて調査した。1段動詞と5段動詞の送り仮名の傾向は、添付資料2に示す。ラ変動詞の「有（ある）」は「有」で「ある」と読ませている例があり、送り仮名はなかった。「来（くる）」については、本文中に11例あるが、「来る」の例があり、送り仮名を用いている。「動詞＋動詞」型複合動詞では、「作り出す」のように前後ともに活用語尾を送るもの、「持越して」のように前は活用語尾を送らないもの「持出で」のように前後ともに活用語尾を送らないものがあった。

添付資料2を見ると、2年版の送り仮名は活用語尾から送っているものが多いが、「開ける」のように活用語尾から送っているものと、「開る」のように「る」から送っているものがあり、同じ語でも揺れがあり、恣意的である。

一方、14年版では活用語尾を送る例はほとんどなく、「思^{おもへ}ば」「作^{つく}た」「立^たない」「困^{こまる}といふ」「分^{わかり}ませぬ」のように、接続助詞テ、バや助動詞タ、ナイ、マス等が漢字に直接接続し、活用語尾は振り仮名で示されている。活用語尾が送られた動詞は、「居る」、「叱る」、「好む」、「辨じる」、「出来る」、「見える」の6つである。送り仮名は、「居^ゐる」、「御叱^{ごち}りなさる」「辨^わじる」「好^{この}まぬ」各々1例で、「出来^こる」は6例、「見える」については「見^みえる」「見^みえた」「見^みえます」というように全てに送り仮名をつけている。

「動詞＋動詞」型複合動詞については次のようなパターンがある。

- ① 前：漢字 後ろ：ひらがな、
ex. 分（わかり）きた

② 前：漢字 後ろ：漢字

ex. 吹（ふき）替（かへ）て

いずれにしても、活用語尾は送っていない。

『交易問答』14年版は、日本語学習用のテキストとして編集されることから、2年版の送り仮名の恣意性を改め、何らかのルールを定めることが必要であったと想像される。

松村(1998)に『会話篇』の第三部の影印版が掲出されている。15章からの漢字仮名交じり文では、概ね14年版と同様に総ルビで活用語尾を送らず、振り仮名に含めている。以下、例をあげる。（）内は、動詞が含まれる本文の章と例文番号である。

^{うらなひ}占ます(15.8) ^{そろつ}^{いる}揃て居か(17.17) ^ま^{あは}間に合ない(18.1)

しかし、少ないとはいえ、次のような例がある。

^{おも}思ひます(15.10) ^{おもひ}思ます(16.19) ^{いつ}言つて(21.7)

^{まけろ}負(16.23) ^{かはう}^{おもひ}買と思ます(16.19) ^{ひけ}引ます(20.3)

^{もて}持ません(22.57) ^す為れば(20.41) ^ひ引けば(20.10)

同じ動詞でも送り仮名を送っている場合と送らない場合がある。また、マス、テ、ナイが漢字に直接接続する場合、動詞の活用がわかれば振り仮名がなくても読むことができるが、上記の可能動詞などは、振り仮名がなければ正確に読めない。仮定形は、活用語尾から送っており、14年版とは異なる。14年版は、仮定形での違い等があるものの、2.2.3で述べた仮名遣いと同様に、『会話篇』を参考に行っていると考えられる。

インブリーは自身の著書で、日本語の動詞は、未然形(Neg. Base)、連用形（初版では Root、2版では Stem）、終止形(Indic. Pres)、仮定形(Cond. Base)に接辞を接続して作ると説明している。例を以下にあげる。

Neg. Base	Root/Stem	Ind. Pres	Cond. Base	
kika	kiki	kiku	kike	(聞く)

ake	ake	akeru	akere	(開ける)
ki	ki	kiru	kire	(着る)

これらを基本形と称しているが、14 年版では、この基本形の後にくる接辞を送り仮名で送っている。この基本形は、サトウ、アストンもその著書の動詞の活用表で用いており、当時の欧米を中心とした日本語学習者にはよく知られていたと考えられる。活用語尾を送ることが浸透しつつあった時期ではあるが、日本語学習者は基本形を学習していたため、基本形の後の接辞を送る形式をとったと推測できる。

7 まとめ

本稿では『交易問答』の明治 2 年版と明治 14 年版の上巻の本文を比較し、文体と語法・文字表記・動詞の送り仮名の点から考察した。2 年版から 14 年版への大きな変更点は次の通りである。

- ① 文体と語法：2 年版の文末「ござる」が、14 年版では「ござります」に変更されている。14 年版では連用形が促音便化しており、文末は丁寧な表現が用いられている。
- ② 文字表記：14 年版は、仮名字体表を掲載し、本文にも様々な字体を多く使用している。仮名遣いは、歴史的仮名遣い、字音仮名遣いに従って直されている。
- ③ 動詞の送り仮名：14 年版では、2 年版の恣意的な送り仮名を改め、活用語尾ではなく、動詞の基本形の後にくる接辞を送り仮名にしている。

宣教師は話し言葉の習得が目標であるので、丁寧な話し言葉の表現が 14 年版の文末表現に反映していると思われる。

日本語学習用テキストへの改編にあたり、仮名遣いと送り仮名については、サトウの『会話篇』を参考にし、恣意的な表記を避けようとしていることがわかる。

注

- 1 本稿では李（2010a, 2011a）所収の『交易問答』（1869, 1881）を使用
- 2 杉松（2020）で明治 14 年版が日本語学習用テキストとして用いられた背景について述べられている。
- 3 『和英語林集成』再版は、明治学院大学図書館の和英語林集成デジタルアーカイブを用いた。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/search/>

参考文献

- 神作晋一（2003）「上田秋成の送り仮名-富岡本『春雨物語』を対象として-」『千葉大学日本文化論叢』4
- 神作晋一（2005）「『古今集遠鏡』の送り仮名-口語表記の与えた影響-」『国学院雑誌』106-5
- 神作晋一（2016）「国学者藤井高尚の著作に見られる送り仮名表現」『国語研究』79
- 木坂基（1976）『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房
- 楠家重敏（2017）『杏林大学外国語学部紀要別冊第1号 <年譜>駐日イギリス外交官の日本語学習・日本研究（1853～1878）』杏林大学外国語学部
- 久保田篤（1998）「明治初期の送り仮名」『成蹊大学文学部紀要』33
- 坂口至（1989）「近世初期の送り仮名：和泉流古狂言『和泉家古本』の場合」『国語国文学研究』25
- 山東功（2002）「明治期送り仮名法制定経緯について」『女子大文学 国文篇』53
- 杉松香苗（2018）「インブリー『Handbook of English-Japanese Etymology』における動詞の分類」『国学院大学日本語教育研究』9
- 杉松香苗（2020）「明治初期の日本語学習用テキストとしての『交易問答』」『国学院大学日本語教育研究』11
- 田中章夫（1983）『東京語－その成立と展開』明治書院
- 築島裕（2014）『歴史的仮名遣い-その成立と特徴』吉田弘文館
- 原口裕（1989）「近代の送り仮名」『漢字講座4 漢字と仮名』明治書院
- 古田東朔（2004）「デゴザル体の文章」『国語論究第11集 言文一致運動』明治

書院

松村明(1998)『増補江戸語東京語の研究』東京堂出版

屋名池誠(2009)「「総ルビ」の時代-日本語表記の十九世紀」『文学』岩波書店

山本正秀(1960)「言文一致文の文法」『講座 解釈と文法 7 現代文』明治書院

山本正秀(1965a)「文法と文体-近代口語文の文末辞法の展開-」『口語文法講座
1 口語文法の展望』明治書院

山本正秀(1965b)『近代文体発生の史的研究』岩波書店

吉野作造(1929)「「交易問答」解題」明治文化研究会編(1968)『明治文化全集
第12巻』日本評論社 所収

李長波編(2010a)『近代日本語教科書選集 第6巻』クロスカルチャー出版

李長波編(2010b)『近代日本語教科書選集 第10巻』クロスカルチャー出版

李長波編(2011a)『近代日本語教科書選集 第12巻』クロスカルチャー出版

李長波編(2011b)『近代日本語教科書選集 第14巻』クロスカルチャー出版

	14年版上巻 ()内振り仮名		2年版上巻 ()内振り仮名		14年版 接続する語
1	1才4	行(いか)ない	1才4	参(まゐ)り申さぬ	合点の
2	1才4	ござります	1才5	ござる	～が
3	1ウ1	あるやら	1ウ5	ござろう	～ことで
4	1ウ1	参(まゐり)ませぬ	1ウ6	参り申さん	合点が
5	1ウ5	ござります	2才4	ござる	～さうで
6	2才2	ござります	2ウ6	ござる	～ので
7	2才5	ござりませう	3才2	ござろう	～で
8	2才6	の	3才3	が	醜夷○仕業 (○に入る)
9	2才6	あるが	3才3	ござる	～で
10	2才7	ことやら	3才6	でござるやら	～になさる
11	2才9	ござります	3才8	ござる	～やうで
12	2才9	ござりませぬか	3ウ1	ござらんか	さうでは
13	2ウ5	ござります	3ウ7	ござる	～さうで
14	2ウ10	ござります	4才8	ござる	～さうで
15	3才3	出(で)来(き)なかつた	4ウ4	出(で)来(き)なんだ	～ことは
16	3才3	見(み)えます	4ウ4	見(み)える	～と
17	3ウ2	作(つく)つた	5ウ1	作(つく)りた	
18	3ウ4	ござります	5ウ4	ござる	～さうで
19	3ウ4	といへば	5ウ4	とさへいへば	
20	3ウ6	さうではないもので	5ウ8	さうではない	決して
21	3ウ8	ござります	6才2	ござる	～もので
22	4才5	ござります	6ウ4	ござる	～さうで
23	4才8	方(ほう)に	6ウ8	方(かた)に	糸助の○に
24	4才8	持(もつ)て参(まゐ)つて	6ウ8	持(もて)参(まい)りて	
25	4才9	方(ほう)へ	7才2	方(かた)に	稲八の○へ
26	4才9	持(もつ)てまゐり	7才2	持(もて)参(まい)り	
27	4才9	方(かた)では	7才2	方(かた)にては	稲八の○では
28	4ウ4	方(かた)で	7ウ2	方(かた)にて	稲八が○で
29	4ウ5	方(かた)で	7ウ3	方(かた)にて	糸助が○で
30	4ウ5	方(かた)で	7ウ4	方(かた)にて	笠平が○で
31	4ウ7	見(み)えます	7ウ7	見(み)へる	～と
32	5才2	切(き)つては	8才8	切り(きり)ては	～を
33	5才3	取(とり)かへたいけれど	8ウ1	取り(とり)かへたいけれど	
34	5才8	見(み)えます	9才1	み(み)へる	～と
35	5ウ6	よりは	9ウ7	とは	～時
36	5ウ7	よくなつて	9ウ7	よくなりて	
37	6才5	か	10ウ4	が	取(とり)かへる
38	6才6	ござりますから	10ウ5	ござるから	～もので
39	6才10	同じ事	11才4	同じ事ことな ※間違い	
40	6才10	ござります	11才4	ござる	～ので
41	6ウ6	なつて	11ウ4	なりて	～に
42	7才2	ござります	12才7	ござる	～さうで
43	7才5	ござります	12ウ3	ござる	～で
44	7才8	ござりませぬ	13才1	ござらん	～ことは
45	7ウ1	ござります	13才5	ござる	～ので
46	7ウ4	ござります	14ウ2	ござる	～ので
47	7ウ7	ござります	14ウ6	ござる	～ことで
48	8才1	こそおもへ	15才4	こそあれ	ありがたく
49	8才2	ないわけでござります	15才5	ありますまい	
50	8才6	話(まを)した	15ウ3	話(はな)した	
51	8才9	ない	16才1	ござらん	～は
52	8才9	今(もう)	16才1	最早(もふ)	
53	8ウ5	ござります	16ウ3	ござる	～で
54	8ウ7	ござりますか	16ウ5	ござるか	～もので
55	8ウ8	わけだ	16ウ6	わけ(わけ)でござる	
56	9才1	いひなさるのだが	17才1	いひなさるが	～ことを
57	9才2	為(ため)	17才3	故(ゆへ)	交易の○ばかりではない
58	9才3	あらう	17才4	ござらふ	～のであることで
59	9才6	ござりませぬ	17ウ1	ござらん	相違
60	9才6	或(ある)	17ウ1	併(しか)し	

61	9才9	ござります	17ウ4	ござる	～さうで
62	9ウ1	ござります	17ウ8	ござる	～ことで
63	9ウ4	ござります	18才5	ござる	～ので
64	9ウ8	だから	18ウ2	でござるから	道理
65	9ウ10	ござります	18ウ6	ござる	～さうで
66	10才7	ござりませぬ	19ウ1	ござらん	相違
67	10才9	方(はう)	19ウ3	方(かた)	はけかたの
68	10ウ2	ござります	20才1	ござる	～ので
69	10ウ3	といふものは	20才2	といふものの	
70	10ウ5	事(こと)だが	20才5	事でござるが	～の
71	11才1	ござります	20ウ5	ござる	～ことで
72	11才9	ござりませぬ	21ウ1	ござらん	相違
73	11才10	御覧(ごらん)なさい	21ウ2	見なさい	考(かんがへ)て
74	11ウ5	ござりませぬか	21ウ8	ござらんか	～では
75	11ウ7	有(あ)るから	22才3	ござるから	場所で
76	11ウ8	ござりませぬ	22才5	ござらん	～ものでは
77	12才1	ござります	22才8	ござる	壹つ
78	12才10	あるから	23才5	ござるから	～様な譯(わけ)で
79	12ウ1	ござります	23才7	ござる	～さうで
80	12ウ6	ござります	24ウ4	ござる	話で
81	12ウ8	ござります	24ウ7	ござる	事で
82	12ウ9	譯(わけ)も	24ウ8	のにも	高くなる
83	12ウ9	種々(いろいろ)と	25才1	種々(いろいろ)が	
84	12ウ10	減て(へつて)	25才2	減(へり)て	
85	13才2	ござります	25才5	ござる	～さうで
86	13ウ1	あるけれど	25ウ8	ありながら	名目で
87	13ウ7	ただ	26ウ1	却(かへつ)て	
88	13ウ8	ござります	26ウ2	ござる	～ので
89	14才1	ござります	26ウ6	ござる	～さうで
90	14才3	できる	27才1	なる	勝手次第に
91	14才4	ござります	27才3	ござる	～様(やう)なもので
92	14才6	ござります	27才5	ござる	～さうで
93	14ウ2	ござります	27ウ5	ござる	～さうでございます
94	14ウ9	御覧(ごらん)なさい	28才6	見なさい	考(かんがへ)て
95	15才2	ござりませぬか	28ウ2	ござらんか	～では
96	15才4	ござります	28ウ5	ござる	～ことで
97	15才8	ござります	29才3	ござる	～ことで
98	15ウ6	ござりませぬか	29ウ7	ござらんか	～では
99	16才1	ござりませぬか	30才6	ござらんか	～ことで
100	16才9	あらうから	31才1	ござらふから	～で
101	16才10	御(お)話(はなし)を致(いたし)ませう	31才3	話(はな)すでござろう	

() 内は用例数を表す。助詞、助動詞等を接続したものを記入した。

	5段動詞	活用語尾が送り仮名になっているもの	活用語尾が送られていないもの
1	開(ひらく)	き(1)	なさった(1)
2	行(ゆく)	く(1)	
3	招(まねく)	く(1)	
4	搦(つく)	く(2)	
5	下(くださる)	さった(1)、さらう(1) ※「さ」から送っている	
6	申(まをす)	さぬ(1)、さん(1)、す(1)	
7	話(はなす)	した(1)、す(1)	
8	精出(せいだす)	して(1)	
9	発明(かんがへだす)	して(1)	
10	仕出(しだす)	す(2)	
11	晝(くらす)	せる(1)	よい(1)、て(1)、にくい(1)
12	起(おこる)	つた(1)	
13	織(おる)	つた(1)、た(1)	
14	取(とる)	つた(1)、り(1)	「取」を「とり」と読む(7)
15	作(つくる)	つた(1)、り(1)、りた(1)、る(1)	
16	困(こまる)	つた(1)、る(1)	
17	始(はじまる)	つた(1)、つて(1)	
18	変(かはる)	つた(2)	
19	下(さがる)	つて(1)	
20	備(そなはる)	つて(1)	
21	及(およぶ)	び(1)、ばず(1)	ない(2)
22	貰(もらふ)	ふ(1)	て(1)
23	買(かふ)	ふ(1)	て(3)、ふと(1)
24	思(おもふ)	ふ(4)、へば(1)	て(1)
25	好(このむ)	まぬ(1)	
26	積(つむ)	む(1)	
27	弱(よわる)	らせ(1)	
28	当(あたる)	らない(1)	
29	知(しる)	らない(1)、り(1)	なさらん(1)
30	売(うる)	らなければ(1)、る(2)	た(2)
54	上(あがる)	り(1)	
31	参(まゐる)	り(2)、りて(2)、る(2)、つて(1)	
32	分(わかる)	りきつた(1)、りません(1)	
33	切(きる)	りて(1)	
34	叱(しかる)	りなさる(1)	
35	腐(くさる)	る(1)	
36	走(はしる)	る(1)	
37	広(ひろまる)	る(1)	
38	儲(まうかる)	る(1)	
39	帰(かへる)	る(2)	
40	置(おく)		「置」を「をかう」と読む(1)
41	続(つづく)		「読」を「つづかう」と読む(1)
42	立(たつ)		ず(1)、ない(1)、にくい(1)、て(1)
43	聞(きく)		た(1)、ました(1)
44	競(きそふ)		て(1)
45	就(つく)		て(1)
46	這入(はいる)		て(1)
47	増(ます)		て(1)
48	減(へる)		て(1)
49	違(ちがふ)		て(2)
50	付(つく)		て(2)
51	従(したがふ)		て(4)
52	持(もつ)		て(4)、「持」を「もて」と読む(3)
53	吸(すふ)		ない(1)
55	欺(だます)		れて(1)
56	似合(にあふ)		ん(1)

	1段動詞	活用語尾が送り仮名になっているもの	活用語尾が送られていないもの
1	見(みえる)	える(1)、へる(1)	た(2)
2	開(ひらける)	け(1)、けた(1)、けて(2)、けなかった(1)	た(2)、て(2)、なかった(1)、る(1)
3	分(わける)	けて(1)	
4	辨じる(べんじる)	しる(1)	
5	出来(できる)	ず(1)、た(2)、て(3)、なんだ(1)、ました(1)、る(7)、×(1)	
6	居(ゐる)	た(1)、て(1)、なさる(2)、ました(1)、る(1)、れば(1)、すわって(1)	
7	見(みる)	て(1)、なさい(3)、る(3)、れば(3)	
8	出る(でる)	て(4)	
9	製(こしらへる)	へた(5)、へる(2)	る(1)
10	貯(たくはへる)	へて(1)、て(1)	て(1)
11	分(わかれる)	れて(1)	
12	怠(なまける)		なまけさへしなければ(1)
13	求(もとめる)		る(1)
14	建(たてる)		て(1)、た(1)、る(5)
15	考(かんがへる)		て(5)
16	述(のべる)		ませう(1)
17	殖(ふへる)		て(1)
18	着(つける)		て(1)
19	費(つひえる)		て(1)
20	儲(まうける)		る(1)
21	用(もちひる)		る(2)「もちゆ」の振り仮名を持つ動詞も含

— 国学院大学大学院特別研究生 —